

日本近世初期における 仏教支援ネットワークについて

高井 恭子

本発表は、日本黄檗による初期黄檗版の成立・刊行・頒布が、どのような背景で行われたかについて、既に明らかにした踏査結果『黄檗文華』第一二七号と新出資料に基づいて明らかにする。

三河龍溪院（曹洞）所蔵の黄檗版一切経（以降、龍溪院本という）は、貞享二年（一六八五）三河龍海院（曹洞）江南和尚による寄進であった。それは、『大明三蔵聖教目録』や『禪林寶訓』を完備した初版と見られる三河華蔵寺（臨済）の入蔵（元禄十五年、一七〇二）より、十七年早い。同寺の黄檗版（以降、華蔵寺本という）は、高家筆頭吉良氏による菩提寺への寄進であることも鑑みて、初刷版（近江正明寺）の内容をさらに整えた改訂版であると発表者は見ている。龍溪院本は『大明三蔵聖教目録』坤巻を備えず、幾つかの収録経典を検討しつつ刊行された形跡を確認することができた。とすれば、同本は、正明寺本から華蔵寺本へと移行する途中の刊行であることになる。

龍溪院の住持は輪番制で、小浜空印寺、古河永井寺、三河長圓寺などからも赴任した。これらの寺院には、それぞれ、酒井忠勝（一五八七―一六六二、雅楽頭―空印寺、嫡男忠直開基）、永井尚政（一五八七―一六六八、山城守―永井寺）、板倉宗重

（一五八六―一六五六、京都所司代―長園寺）が檀越となつてゐる。檀越には、東渡・開宗したばかりの日本黄檗を支援するという共通点があった。さらに、彼らは幕府の重臣で、永井を除いて三河西尾の出身であることも共通し特徴的である。

龍溪院の後に黄檗版を施入した華蔵寺（高家筆頭吉良氏菩提寺）は、臨済であるものの、西尾の直近である三河吉良に存在する。吉良氏においては、義冬―義央（一六四一―一七〇二）と二代にわたつて、日本黄檗住持の隠元隆琦（一五九二―一六七三）との交流があった。当然、吉良氏は、酒井氏や板倉氏との交流も密接であつたことは間違いない。

また、二代住持木庵性瑠（一一六一―一六八四）においても、隠元と幕臣の交流を持続しつつ、曹洞僧との交流を深めたことは語録から分かる。

三河龍溪院は、黄檗版一切経所蔵だけでなく、五代住持高泉性激（一六三三―一六九五）の額を法堂に掲げるなど、三河幕臣らとその檀寺や日本黄檗との密接な交流を証明している。また、木庵と交流があつた出山道白（一六三五一―一七一五）を承けて曹洞宗内の規矩を整備した面山瑞方（一六八三―一七六九）は、龍溪院の輪番に当たつた僧である。

ここから新たな点に注目できよう。それはすなわち次のことである。まず、幕臣等による一切経購入や日本黄檗との交流からは、日本黄檗の開宗―伽藍造営―黄檗版開版―頒布といった初期事業に、三河出身の幕臣グループの貢献があつたことである。次に、一連の黄檗版事業が、政治的に軌を一にするグループによつて支援され、宗旨を超越した寺院によつても事業が推

第9 部会

進されたことである。三河龍溪院は、こうした幕臣グループの支援を受け、宗派や派閥を超越した僧侶たちによって支えられる寺院であったと見ることができよう。こうした宗旨を異ならせる寺院や僧侶たちの事業推進は、特に注目に値する。それは、曹洞（黙照禅）・臨済（看話公案禅）・日本黄檗（文字禅）は、本来宗旨を異ならせるからにはかならないからである。状況からすると、一緒に事業を進めた各宗派は、後にその宗旨に遵って、行動を異ならせることが想像できる。であれば、その各宗派が宗旨を超えるための理の所在を解明する必要があるが、それについては別に譲りたい。

近代ドイツ宗教思潮における仏教

——ベックを一事例として——

春 近 敬

ドイツ人ヘルマン・ベック (Hermann Beckh, 1875-1937) はベルリン大学にてインド学を学び、カーリグーサーの研究で哲学博士号を、チベット文法の研究で教授資格を取得したなど、当時のドイツの典型的な文献学者であった。しかし一方で一九一一年、シュタイナーの講演を初めて聴き、人智学の世界観に大いに傾倒する。第一次大戦後の一九二二年、人智学のキリスト観に基づいた宗教団体「キリスト者共同体」に、設立メンバーの一人として参加した。以降、一九三七年の死去まで同団体の

司祭として活動した。

ベックは、仏教は哲学的要素ではなく神秘的要素こそが核心であるとし、仏陀は哲学者ではなく、大乘仏教的な救済者であり、したがって南伝仏典よりも、神秘的・神話的要素の強い北伝仏典が仏教の本意を伝えているとした。このような仏教理解は、仏教とは哲学的なものであり、合理的に解釈可能であるとする当時のドイツの仏教研究の主流から大きく逸脱しており、今でも仏教研究史においても重く扱われていない。

このベックの仏教理解の背景には、シュタイナーの人智学の世界観が存在する。人智学では、人間は瞑想等による特定の修行を通して、「超感覚的領域」である高次の認識を獲得できると考える。シュタイナーは、この「超感覚的領域」の認識の上に立てば、精神や宗教、人類の問題を近代自然科学と同じ厳密さで探究できると主張した。一九一六年に書かれた名著『仏教』には、既に人智学の世界観の影響がみられる。一九二二年以降のベックは、キリスト者共同体司祭として人智学の世界観を全面に押し出した著作を多数発表するが、根本的な仏教理解では共通している。

この人智学の世界観の影響を受けていると考えられる仏教理解としては、以下の要素が挙げられる。①仏教は哲学的、思想的なものではなく、徹底して実践の行としてのヨーガである。②仏伝などに見られる神秘的、幻想的な記述は文学的表現でも仏教の神話化でもなく、現に存在する「超感覚的領域」の世界の諸相を象徴的に表現したものである。③仏教はキリスト教に最終的に合流されるべき「生命の流れ」である。しかし、ここ